
Love is blind

藍澤青華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love is blind

【Zコード】

Z2017BA

【作者名】

藍澤青華

【あらすじ】

魔法が存在する世界で神子が存在する屋で、
快活でお転婆な主人公と神子のお話。

別サイトで挿絵つきの話が読めます。

話の内容はここにアップしているものと同じものです。

厚い雲に暗い空。

まるでこの国を表したかのよつた闇に映える純白の城。
城内の広間は入りきれないほど兵士で溢れかえっている。

兵士たちの熱気は凄まじく、一人の男の名を呼んでいた。

「ケトちゃん、はい いつものね！」

「ありがとう…いつも助かるわ…！」

ケトは店で買い物袋を受け取ると、不思議なジョーダアの窓から街を見回す。

私のよく来る城下町はとても活気にあふれ、笑顔が絶えない所だ。
しかし、今日は何だかそわそわと落ち着かないような、喜びを押さえつけていいるような、そんなふわふわとした空気が街を包んでいる。

「・・・おじさん 今日は何があるの？」

「ケトちゃん、本気で言つてんのかい？？」

ケトが不思議そうな顔をしているのを横目にため息をつき、

「我が国の勝利を祝つてるんだよ」

「勝利・・・・・つて大変…！」

「ああ、早く帰つた方がいい 忙しくなるぞ」

この国は世界で今一番勢力を持つことだらう。

世界は国の領地を広げ、自國の力を強くしようと日々領地争いを繰り広げている。

そして今一番頂点に近いこの国は、軍事力もやる」とながらもう一つ突出しているものがある。

それは神子の存在だ。

神子とは、魔法を使うことが出来る能力者のことである。

神子は国に一人は必ずおり、神子と軍事力は比例するらしい。

「医院長！！大変！大変です！！！」

「まあまあ、そんな慌てて・・・」

私が、ケトは2年前から城にほど近い小さな個人病院で見習いとして働いている。

私の家自体は裕福だった。何不自由ない生活をしていた。

しかし、父が病気で倒れてからはとても大変だったのを記憶している。

会社を経営している父の不在は私の家族にまで影響を及ぼしたのだ。

いまは全快したので、笑い話にはなっているが。

そして父を治療したのがこここの病院長だった。

多大な感謝とともに、自分も誰かのためにそうなれたらと思ったのがきっかけだった。

そして見習いではあるが、私の左胸には医療従事者がつけるバッジが光っている。

これは私の夢の第一歩なのだ。

「そうですか、勝利したんですね・・・」

「準備しますか？」

「そうですね、なるべく沢山の負傷者を受け入れられるようにしてください。」

「はい！」

「この国の勝利は確かに喜ばしいことなのかもしない。勝利を得た国の平和は少し保たれることになるのだから。しかし、戦争で得られるものは勝ち負けだけではない。たとえ勝利を得たとしても、この国を守るために戦った兵士たちの傷跡は残る。」

肉体にも、心にも。

負傷した兵士たちは各地の病院に搬送され、一時的な応急処置を受け、入院が必要な者は大病院へと送られる。

病院に收まりきらないほどどの兵士たちをみると、私はやりきれない気持ちになるのだ。

戦争なんて無くなつてしまえばいい

と。

「ケトさん、新しい布を持ってきてください！大量に！！」

「はい！！」

今回も変わらずの大勢の兵士たちが搬送されてきたため、病院は大忙しだった。

そしてケトは、急いで倉庫に新しい布を取りに行く途中で蹲る男を見つけた。

「・・・どうしたの？大丈夫？？」

思わず声をかけたものの返事はない。覗き込むと、足首を負傷したようで血がにじんでいた。

「・・・大変！手当てしなきや！」

肩に腕を回し、引きずるようにして病院に戻り手早く治療をする。幸い傷が深くなかったようで、簡単なもので済んだ。

ケトがほつと/orして顔をあげると、男はじっと見つめてからつぶやいた。

「・・・ ありがとう、本当に助かりました。」

「あ、しゃべれたのね！」

「ああ、まあ・・・」

「しつかし/o兄さん/iい声ね！セクシーボイス！…」

「・・・・・」

おもむろに男は俯き、肩を震わせたかと思つと笑い出した。笑い出して止まらない男にきょとんとした顔のケト。

「ありがとう、嬉しいよ」

そして男は笑つた。満開の笑顔で。

これが私と彼の出会いだ。

今でも時々考える もし/oの出会いがなければどうなつていたのかと。

ねえ、貴方はどう思う？

笑つて出会えて良かつたと言つてくれるかな？

それとも・・・・・・・・・。

Act · 1 (後書き)

初めまして。

連載始めました。

良ければ読んでやってください。

そんなに長い間生きてた訳じゃないけど、最近感じるんだ。
縁つて本当に存在するつてこと。

もう一度と会うことがないかもしれない、そうなることが当たり前に感じても次の日にばつたり会つことだってある。

それつてつまり運命なのかな？

だとしたら、ぞうきんを絞つただろう灰色の水を頭からかぶつて目の前にいる、昨日会った男の人ともそういうのかしら？

「声は相変わらずセクシーだから大丈夫！！」

「何のフォローにもなつてないよ・・・・。」

今日も街に買い物に出かけていた私はお皿当ての物を見つけて帰る途中だった。

大通りを歩いていた私の横のドアから見覚えのある男の人が出てきた。

昨日、足の手当てをした人だと思い当たり嬉しくなつて声をかけようとしたその時だった。

上の階の女性がバケツの水を捨て、それが男の人の
。

「まあまあ、大変だつたわねえ。」

今はまだ冬。さすがに風邪を引いてしまうので、この病院の控室に連れて帰ってきた。

院長は彼の姿を見るなり、動じることもなく風呂を勧め彼に温かい飲み物を差し出した。

私は、小さくなる彼を見つめて少し笑ってしまった。

彼はそんな私を横目で睨みながら、

「・・・・・凄く臭かつた・・・・・」

思い出したのだろう、眉間にしわを寄せて不機嫌そうにしつぶやいた。

「ねずみ色だつたもんねえ~」

「まあまあ、ケトさん。それで・・・ええと・・・・?」

院長は田でお茶菓子と私たちのお茶を用意するよう伝えた。しぶしぶ席を立ち、用意をする。

なかなかあんな美形に会えることなんてないから、もう少し話しがかつたのに・・・・・! 院長のいじわる〜〜。

「ああ、申し遅れました。私はレナイ、レナイ・ファーレントと申します。レナイと呼んでください。」

「レナイさん、ですね。レナイさんはどこかへお出かけになる最中だったのでしょう? 大丈夫なのかしら?」

「ええ、済んだ後だったので不幸中の幸いでした。」

「そう、良かつたわ」

「・・・・・・ありがとうござります。」

あれ?

そう思つて彼を見るけれど、院長と彼の間に流れる柔らかな空気に何ら変化はない。

外の柔らかい光が彼の髪を照らして透き通るよつて美しかった。私の視線を感じて彼は小さく笑つてくれたけど・・・・・。

どうしてそんなに泣きそうなの・・・・?

どうしてそんなに泣きそうなの・・・・?

ふいに誰かが外からノックをした。

反応する一人を制止し、ケトがドアに向かう。

ドアの外に立っていたのは、先日まで入院していた兵士だった。

「お久しぶりです！調子はどうですか？」

「ああ、とってもいいよ。ありがとう、ケトちゃん。」

兵士はケトの笑顔を眩しそうに見た後、部屋を覗き込みながら言った。

「院長さんは・・・・・」

不意に止まつた言葉にケトは思わず兵士を見る。

兵士は瞳を揺らしながら震えた声、唇でレナイを見てこいつ眩いた。

【神子さま
と。】

Act · 2 (後書き)

ああ・・・一番書きたい人がまだまだ出番待ち・・・です。

私の昔の話をしてもいい？

私の家族はそれはそれは私を愛してくれていたの。

私のことを尊重し、慈しんでくれた。両親も兄達も姉達も。平和だったんだよね。でもそれってすごく尊いものだつてことは父が倒れて思い知つたの。

両親は・・・危惧していたみたいだけだ。

その心配通り、父が倒れた間の代わりに置いた代理の人が、会社を乗つ取ろうとしたらしいの。

家も・・・何もかも自分のものにする予定だつたらしいわ。

そうなる前にほかの社員の人が動いてくれたし、父も回復して事なきを得たんだけど。

そのこともあってからなのかな・・・私ね、降つて湧いた力つてやつが好きじゃないの。

確かにチャンスだとしても、その力を正当に使う人がこの世にどれだけいるのかな？

私は正当に使えるかな

「最近、何だか距離を感じるんだ・・ケト、どうして？」

そう言つてレナイは悲しそうに咳いた。

レナイはあれから良くしてくれたお礼と言つて、毎日ではないがこの病院に来るようになつた。

何か手伝えることはないかといふレナイに院長は最初の内は丁寧に断つていたが、レナイのあまりの熱心な気持ちに負け、簡単な雑用を頼むようになつていつた。

だんだんレナイが馴染んでいく。でも、私は、彼を受け入れきれ

ないでいた。

彼の視線を感じる。笑え、笑つて何でもないと黙つてやれ。

自分が笑えればきっと彼も笑つてくれる。さあ、早く。

切なくなる気持ちを無理やり抑えて精一杯の笑顔をしたけど。ぎこちない表情で、しかもそんなことない、とかぶりを振るだけしか出来ず自分でも突然湧き出した得体のしれない相反する気持ちを持て余していた。

ただ、彼が【神子】で彼自身は・・・・・・。

兵士がレナイのことを「神子様」と呼んでからの行動は早かつた。院長と私が呆然とする中、レナイの両手を自分の両手で包み込むように優しく握りしめ、胸の中にある思いを全て流すようにただ静かに泣き出した。

レナイは、一瞬びっくりしたように目を開いたが、切なそうにまるで自分が傷ついたように目を細めた後兵士の手を握り返した。

兵士は顔をあげ、許しを貰つた子供の様に嗚咽を漏らした。

そしてレナイはこみ上げてくる涙を拭うこともせずに

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・・・つ・・・！」

そういうて泣き崩れたのだ。

「え？ レナイが夕飯作るの？」

「うん、結構得意なんだ。ケトは何が食べたい？」

レナイが神子だつて分かつてから、院長と私は呼び方を一度改めたんだけどレナイがそれを許さなかつた。その頑固さつたらカミナリ親父も顔負けだつた。結局私たちが折れたんだよね。

「そうだな・・・ハンバーグかな。」

私がまともに答えるとは思つてなかつたのかもね。ひどいな・・・

私は・・・。

レナイはちよつとびっくりしたように私を見て
「が・・・頑張るね！！」

彼は嬉しそうに心から笑つた。

その笑顔にちよつと私も嬉しくなつたんだ。

その後、あの兵士のことを少し考えた。

兵士はレナイに負の感情は持つていなかつた。
むしろ神子への謝罪の気持ちで溢れていた。

レナイは力を正当に使える人なのかな・・・。

あの時、握りしめあつていた兵士の右手の指は全て無くなつてい

た

。

Act・3（後書き）

思いがけず兵士さんがキーパーソンになつていきました。
次回は兵士さん大活躍の巻。

彼に名前はまだないです。（付けてくれる人いるならせひゼひ。）
イメージは「オールウェイズ3丁目の夕日」での役の堤真一さん又
は「相棒」での役の寺脇さんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2017ba/>

Love is blind

2012年1月10日21時47分発行